

## 第四回 日本人の原風景と棚田

日本農村風景研究所 勝原 文夫

### 講義のあらまし

棚田は、わが国水田農村風景の大事な一部と考えます。そして、水田農村の風景は、われわれ日本人の「心のふるさと」=「国民的原風景」をなすものと考えます。そもそも「風景」は、「景観」のように専ら視覚によって享受さるべきものではなく、聴覚をはじめとする他の五感をも動員した心身全体(心では「原風景」が有力に働く)で味わうべきものであり、棚田の場合も、その例外とは考えられません。

### はじめに

今日の題は「日本人の原風景と棚田」とありますけれども、私が棚田について特に関心を持ち出したのはごく最近で、中島先生のお誘いなんかがあって始まったことです。ですから今日の話も、棚田を含んだ水田農村と原風景ということで、話をさせていただきたいと思います。

### 「風景」と「景観」の定義

はじめに少し、難しいとかややこしいことを言いますが、まずは風景の概念をめぐる話から始めたいと思います。皆さんもご存じのように、明治27年に志賀重昂が『日本風景論』という本を書きました。以来、一連の日本の風景論の流れというものがあるわけですが、それを見ていきますと、もっぱら「風景」という言葉が使われていて、今日のように「景観」という言葉はあまり使われていません。ところが、最近はほとんど「風景」でなくて「景観」という言葉が使われています。

しかし、「景観」というのは、元来は美醜という審美的視点を含まないもの、単なる「環境の眺め」ということで、昭和7年から10年前後ぐらいに、地理の方でよく使われていたようであります。例えば有名な辻村太郎の『景観地理学講話』というのも、昭和12年の発行になっています。ですけれども、戦後は「景観」に美醜の視点を盛り込んで、「風景」と同じように使用するようになってきました。そし

て研究者の間では「どちらを使っても同じだ」という意向もありますので、私もかつては風景というべきところを景観と言い、あるいはわざわざ「景観美」と「美」の字を付けたりしていました。また、今でも景観と言ったり風景と言ったり、両者をほとんど同じように使う場合もたびたびありますけれども、厳密に言いたいときには両者を区別して使っています。そして、景観は英語で言いますと landscape、風景には scenery という英語がふさわしいとして、最近の私は景観ではなく風景の立場に立つものだと主張しています。

### landscape と scenery

今、景観には landscape、風景には scenery がいい、当てはまる、という風に言いましたが、英語の方でも landscape と scenery を区別されない向きもあるようです。けれども、landscape というのはもともとは地理の用語、また絵画用語ということのようですし、scenery は芝居用語といいますが、舞台のバックを言うんだそうで、そういう風に、landscape と scenery は出自が違うようです。その違いから考えますと、こういうことが言えると思うんです。すなわち、landscape が地理用語であるとともに絵画用語である、ということは、視覚が中心。ところが、scenery は芝居用語だとしますと、視覚だけじゃなくて聴覚、場合によっては嗅覚等も動員した概念と考えられます。

繰り返しますと、「景観」(= landscape)の場合は視覚が中心、目に見えるものが主たる対象になり、「風景」(= scenery)の場合は視覚だけでなく他の五感もかなり大きく取り上げられる、ということになるかと思うんです。で、その一つのあらわれが、最近問題になってきています soundscape(音の風景)なんだろうと思われます。

今述べた景観と風景に関する概念論を主客の視点で整理してみますと、風景も景観もどちらも主体と客体があって成立する「関係概念」といわれるんですが、どちらかといいますと風景は客体を捉える主体に重点がある、景観は主体に捉えられる客体に重点が置かれる、という傾向があるかと思われます。そうしますと、景観は主体が客体をどうするかという操作に重点が置かれて、景観工学(know how)に発展するし、風景の方は主体が客体をどう捉えるかというような風景哲学、風景原論(know why)という展開を見せる、という風に言えるかと思うんです。そして、私はというと、私は景観工学の立場ではなくて、風景原論の立場に立っているという風に思っております。

以上のことを前提に、あらためて風景の概念はと問うと、これもいろいろ人によって違う表現をされるんですけども、私は一言でいいますと「風土によって触発される審美的印象」ということになるとし、その享受はといいますと、「風景における客体の享受は景観のように単に視覚のみによってその美を捉えるべきではなく(これがもし言い過ぎであれば、視覚を過大視することなく)、聴覚を初めとして他の五感をも動員し、主体である人間が歴史的・社会的存在であるところから、その社会の歴史、コミュニティの雰囲気等までも呑み込んだ形で、主体を中心に心身全体で全方位的に感得するべきものだ」という風に言えるかと思っています。

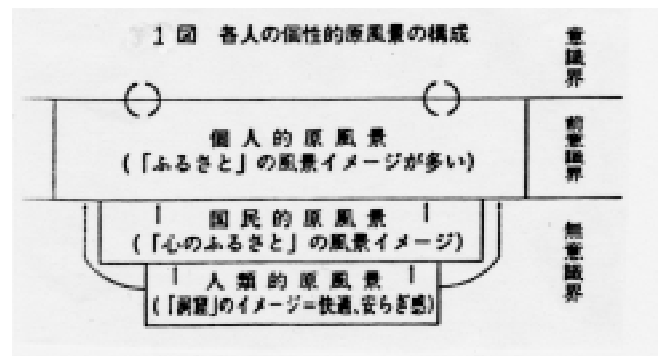
今、「心身全体」と申し上げましたけれども、その「心」では、タイトルにも出しました「原風景」というのが有力に働くだろうという風に思っております。そういうことで、次は原風景の話に入りたいと思います。

### 三つの原風景

原風景というのは、国語の辞典を見ますと、大辞林では「primal scene」とあって「原体験が生ずるさまざまなイメージのうち風景の形をとっているもの」というように説明しておりますし、岩波の広辞苑ではこれは第4版で初めて出てきたんですけども原風景を「心象風景の中で原体験を想起させるイメージ」という風に記しています。以上は国語辞典での話ですが、私は原風景を簡単には「幼少年期・青年期における自己形成空間」という風に言っております。そして、この表現は奥野健男という、先年亡くなった文芸評論家の『文学における原風景』という本からお借りしているのです。

奥野さんのこの本は作家の原風景を主として扱っているんです。例えば室生犀星のそれは金沢だ、宮沢賢治でいうと北上山系で、それらが彼らの原風景で、彼らの文学を形作るんだと、ちょっと表現が正確ではないかも知れませんが、そういう風に言うわけです。ところで、私は何も原風景というのは作家だけの話ではなくて、我々みんなに似たようなものがあるんじゃないかと考え、それを奥野さんの言葉を借りて「幼少年期・青年期における自己形成空間」と言おうというわけです。普段は前意識・無意識の世界にあるけれども、何かの時にフツと思いつく、意識界に立ち現われる「幼少年期・青年期に非常に強い印象を受けたイメージ」、これを原風景と言おうというのです。奥野さんも原風景を言う際に、ユングあたりの深層心理学を使っているわけですが、私も、特に勉強したわけじゃありませんけれども、深層心理学を借りて原風景を考えています。

次に、1図 原風景に関する図がありますけれども、これが私の考えている原風景の内容です。



意識界、前意識界、無意識界とありまして、無意識界とはユングなんかの言っていることですし、それから前意識というのはフロイトが言っていることで、意識界と無意識界の中間を意味します。で、ここに書きましたように、「原風景」には「個人的原風景」と「国民的原風景」「人類的原風景」、こういう3つがあるかと思うんです。そしてそれらが重層して各人の“個人的原風景”を形作って、風景を享受する、評価する際の基点になるだろうと思ってみるわけです。

個人的原風景、これは1図で前意識界というように書いてあります。そして括弧しまして「ふるさとの風景イメージが多い」と記しています。ストレートに全部が全部ふるさとの風景イメージではありませんけれども、ふるさとの風景のイメージの場合が多いだろう、ということです。それから国民的原風景は「心のふるさと」の風景イメージだろう、それから人類的原風景というのは、そこに書きましたように「洞窟」のイメージ=快適・安らぎの感だろうという風に思っています。いずれもイメージの話ですけれども。

### 「原風景」と「ふるさと」

「ふるさと」「心のふるさと」が出てきましたので、ふるさとと原風景の関係をお話しします。「ふるさと」とは、広辞苑をひもときますと「自分が生まれた土地、かつて住んだことのある土地、またなじみ深い土地」とあります。それから、少し古いけれどもこれは昭和49年に建設省が調べたものですが、それによりますと、ふるさとを「自分が生まれたところ」と意識している者が過半の56%、それから「少年・少女時代に住んでいたところ」とする者が18%、「両親、きょうだいに住んでいるところ」とした者が11%、その他が15%、ということになっています。もう一つ、「ふるさと」というとどんなことを思い浮かべるか、という、2つまで答え得るアンケート調査(昭和48年)の結果を見ますと、「美しい自然」がトップの55%、「両親」が2位で30%、以下、先祖の墓や寺とか、幼なじみ、鎮守の森や祭り等という風なことになっていまして、これら

を見ますと、どうやら「ふるさと」というのは自然、またこれと並んで両親、幼なじみ等の人間関係が深くかかわっていて、具体的には農村である場合が多いという風に推測されます。

ところで、現在は都市化がどんどん進んでいるわけで、そんな中ではどういうことになるんだろうか、ということが思われるわけですが、それについては私は以下のように思っています。「確かに現在のわが国は都市への人口集中が進み、都市に住んでいる者が多くなったが、彼らの中には自分の代に農村から出てきた一世のほかに、両親の代、祖父母の代に都市に出てきたという二世、三世がかなりの数に上る。一世のように直接に農村をふるさとに持つ者は、農村に生まれ育ったわけで、その農村の風景がその人の人格形成に大きな影響を及ぼし、個人的原風景としてその人が風景を評価するときの一つの基点になることは確かと思われるけれども、二世・三世はどうか。彼らも、両親や祖父母からそれぞれのふるさとの話を聞かされたり、両親や祖父母に連れられて実際にその地を訪ね、滞在していることが多く、間接的ながら農村を“ふるさとに近いもの”、“ふるさと”(広義)と感じているものが多いと思う。」

こう言っている私も、実は東京生まれの兵庫県人ということです。両親が兵庫県出身で、夏休みにはよく、父の郷里である播磨の溜池の多い水田地帯、そこに帰りまして、溜池で水遊びに興じたりしたものです。そういうことで、私も二世なんです。当時味わった農村の風景が私の“ふるさと”、個人的原風景の一つとして、以後の私の農村風景、風景享受の重要な基点になっているのです。

ここまでが二世・三世の話ですが、四世、五世等はどうか。私は、彼らだって学校での国語や唱歌の授業、それからテレビ、読み物、旅行、ことに農村体験旅行等いろいろな手段を通じて、それなりに農業、農村を知って、これに関心を持っていると思っています。もっと基本的には、どんな日本人にも、弥生、今はもっと遡って縄文末期とか中期に段々遡っていますけれども、それ以来の水稻農耕の民という伝統の血が流れていて、農業、農村に関心を持っ

ていると思われます。要するに直接に農村をふるさとに持たない者も、日本人は誰も“心のふるさと”これが私の言う国民的原風景ですけれどもとして、心の奥底に、ある農村、水田村の面影を有しており、風景評価の基点になる場合があるかと思われま

ところで、確かにふるさとというのは必ずしもいい思い出ばかりを残すわけではありません。石川啄木なんか「石をもて追はるるごとく ふるさとを出でしかなしみ 消ゆる時なし」と詠っています。しかしその啄木が一方ではまた「ふるさとの山に向ひて 言ふことなし ふるさとの山はありがたきかな」という風にも詠っているんです。こういう風に、ふるさとを思う気持ちは胎内回帰感情のような、人間の本能的、根源的な感情とっていいのかもしれないし、このふるさと感情というものを広げて考えると、日本人全体の先祖遡及につながるものとしていいのかもしれないと思われま

いずれにしても、これらの原風景 個人的原風景、それから国民的原風景、そういうものが農村であることが多く、その農村が、半自然という格好を取って、都市に比べて自然性に富み、それだけ生身のといいますが、人間も生物の一つですけれども 人間にとっては安らぎ感が得られやすいと考えられ、そういう意味ではもう一つ奥底にある人類的原風景とも呼べるべき「安らぎの原風景」に適応的なものになっている、という風に言えるかと思いま

### 「人類的原風景」 快適・安らぎ感

原風景の三つのうち「個人的原風景」、それから「国民的原風景」と話してきて、今、安らぎの原風景というようなかっこうで「人類的原風景」に話がやってきました。「人類的原風景」というのは、快適・安らぎ感のあるイメージの風景で、次にこれを問題にしてみますが、これについては、イギリスの地理学者のアップルトンという人が、面白い考え方をしています。

しかし、私は直接アップルトンの著書を読んだわけじゃありません。樋口忠彦さんという方が『日本の景観 ふるさとの原型』という、非常に素晴らし

い、有名な本を書いておられ、私は、その中で樋口さんが、自分の考え方ともかなり重なり合うという格好で、アップルトンの理論を紹介されているのを知ったのです。それによると「彼は(彼というのはアップルトン 引用者注)人間も含めた全ての動物にとって、棲息地・棲処の基本条件は、自分の姿を見せることなく相手の姿を見ることができる、という条件ではないか、そして人はそのような条件を備えているように象徴的に表現されているところ、すなわちそのような条件を備えているような景観として見えるところに美的満足感を感じるのだ、という」となっているのです。象徴的という風に出ていますけれども、アップルトンはいろんなものを挙げているようです。例えば「自分の姿を見せることなく」というのでは、煙だとか霧だとか、まあいろんなものを挙げています。

私は「自分の姿を見せることなく、相手の姿を見ることができる」という、この二つの条件をかなえているものとしていちばん説得的なのは、山の中腹の洞穴だと思ふのです。これは自分が敵<sup>ほらあな</sup>から見えないし、自分の方は敵を見ることができる。それは敵じゃなくて獲物でもいいんですけれども、彼が例示しているものの中で、いちばん説得的だと思ふんです。いずれにしてもそういう風な二つの条件を満たしているだろうと思われるようなところに、安らぎを感じて、そこに美しさを見る、というのがどうもアップルトンの考え方のように

で、今紹介したところに「美的な満足」という風にありますけれども、私の考えで、それを難しく表現しますと「形成要素の調和による快感、精神的安らぎ感、人格的充足の感情」となるんですが、簡単に言うと「やすらぎ感」ということになろうと思っています。

というのは、美の定義というのは12もあるそうですが、それを一言で言えば「快適」ということになろうそうです。で、それを私なりにもう少しハッキリさせると、以上のように「形成要素の調和による快感、精神的安らぎ感、人格的充足の感情」という風になろうかと思ふんです。

純粹芸術じゃなくて民芸のような、応用芸術で追

求する美というのはまさにこういうものだろうし、農村の風景形成、ルーラル・デザインを問題にするときも、その追求する美とはまさにそういうものだろうと思うのです。これを一言で言いますと、安全性志向の美とも言え、これはアメニティに通じると思うんですけども、これが人間に共通した原風景、風景を評価する際のいちばん根底にあるものだろうという風に思うわけです。それはまた、蔵風得水の風水思想にも通じるものだろうという風に、私は思っています。

余談になるかも知れませんが、例えば鎌倉です。あそこに鎌倉幕府が幕府を開いたわけですけども、鎌倉は、東西北、これが山で囲まれて、南が海。まさに蔵風得水の地で、風水思想に適っていて非常に安全なわけですね。だから幕府があそこにつくられたんだろうと思います。

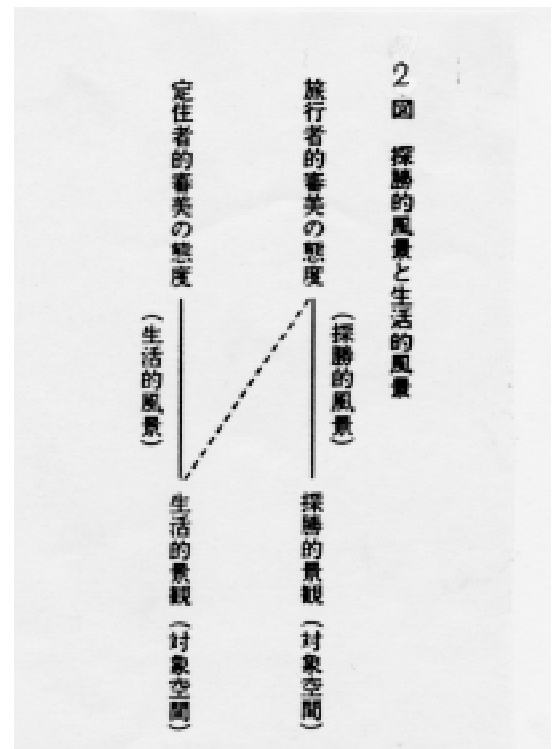
繰り返しますが、そういう安全性志向の風景イメージ、これが風景を享受する際の原風景、そのまたいちばんの基礎にある「人類的原風景」で、これに適合的な、そういう「国民的原風景」、それから「個人的原風景」、これらが一つになって、風景を評価する際の基点になるだろう、という風に私は思うのです。

### 「探勝的风景」と「生活的風景」

今、基点、基点といいましたけれども、まさに基点でして、それが基準というわけではないんです。というのは、2図に「探勝的风景」と「生活的風景」というのを出しておきましたけれども、その両者の場合で、原風景の作用の仕方として二通りが生じると思うんです。

景観というのを単なる眺めとして対象空間という風に考えますと、そこにありますように下に景観があって、上に、そういう景観に風景として接する態度が二通りあると思うんです。

2図の上段右側に「旅行者の審美の態度」、左側に「定住者の審美の態度」という風にあります。一般的には「旅行者の審美の態度」が探勝的景観名勝等の非常に変わった対象空間に接した場合に、風景としては探勝的风景ができるであろうし、「定



住者の審美の態度」が、生活的景観、対象空間 平凡な都市なり農村の景観 に接した場合に成立するものが生活的風景だろう、という風に思われます。これが普通の現象で、実線で示してあります。ここに斜めの点線も描かれていますけれども、それは例外的にあり得るということを示しています。

なぜこういう区別をするかといいますと、先に示唆しましたように、原風景の働きが、探勝的风景の場合と生活的風景の場合で違うのではないかと考えられるからです。というのは、探勝的风景の場合は、あくまでも旅行者ですから、自分が持っている原風景と全く違ったものもいい、美しいとするし、それから非常に似たものもいい、美しいとするんです。このことは外国へ行ったら非常にハッキリすると思うんです。滞欧中の和辻哲郎が奥さん宛に出した手紙(和辻哲郎『妻 和辻照への手紙』講談社、1977)をご覧いただいたらよくわかるんですけども、和辻は滞欧中しょっちゅうそういう体験をしています。ところが生活的風景の場合は、日常そこで暮らしているわけですから、変わったものを、いつかはいいと思うかも知らんけど、毎日それに接するわけですから、そういう変わったものを必ずしも好し、美しいとはしないんですね。というのも、次第に安らぎ感がなくなってくるわけです。そして、逆に非常

に原風景に近いものは、これは飽きもしないし、それから安らぎ感を得て、好し、美しいとするんですね。

まあ以上のように、探勝的風景と生活的風景の二つで、原風景の働き方が違うと思うんです。だから原風景というのはあくまでも基点であって、基準ではないというわけです。

原風景の話は、非常に大雑把でしたけれども、以上で終わることにしまして、次に soundscape の話をしたいと思います。最初に景観と風景の違いを言いましたけれども、その際、風景の方が視覚だけでなく聴覚だとか嗅覚だとか、要するに視覚以外の五感、そういうものにも関心を払う傾向にあり、その一つが最近出てきている soundscape の動きではないかという風に申し上げましたが、その soundscape の話の一端を今からしたいと思います。

### 「サウンドスケープ」 「音の風景」

「Soundscape」という言葉はもちろん landscape から派生した言葉だろうと思いますが、soundscape を「音の景観」と訳している人はほとんどいなくて、皆、「音の風景」と言っています。これはまさに、視覚以外の分野に入ってきたんで、景観よりは風景という方がふさわしいと思われるところから来ているのだらうと考えます。ところで、これは誰が言い出したかといいますと、マリー・シェーファーというカナダの前衛作曲家が1967年に言い出したということになっています。

それでは soundscape の定義は、と言いますと、「個人あるいは社会によってどのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音環境のこと。従って、soundscape とは個人とそうした環境との間の関係によって規定される」、こういう風にシェーファーのグループは定義しているようです。これを一言で言いますと、要するに、音を人間がどういう風に捉えて、どういう風な感情を持つかということだと思えます。例えば、物理的に何デシベルだとかいうそういうことじゃなくて、私なら私が、鐘なら鐘の音をどういう風に聞くかということの問題にしようというのが soundscape のようです。って

みれば、機械論的な把握じゃなくて意味論的な把握をするというのが soundscape のようです。

### 「サウンドスケープ」誕生の背景

これはどういうことから生まれてきたかといいますと、一つの背景には、マリー・シェーファーを先ほど前衛作曲家だと言いましたが、前衛音楽の登場に見られるような現代音楽、美学上の潮流があるようです。二つ目は騒音公害、これを音としてどう処理しようかという社会的問題。それからもう一つは、これは人によってそういう指摘をする人がいるということで申し上げるんですけども、北米のエコロジー運動からも影響を受けているという風にいわれています。

前衛音楽の話をちょっとしますと、皆さんご存じかも知れませんが、前衛作曲家のジョン・ケージ、これにマリー・シェーファーは非常に影響を受けたというんですが、ジョン・ケージは、有名な作品として「4分33秒」というのを作っています。それは、ピアノ奏者が壇上に上がってピアノの前に座って、ピアノの蓋を開けるんですが、何も演奏しないんです。そして、4分33秒経ったところで、蓋を閉じて帰ってしまうんです。そうすると聴衆が「何だ、けしからんじゃないか」って、ガタガタ音をたてたり口笛を鳴らしたり、騒ぐんですね。しかしケージにいわせれば、それが、その騒ぎの音が自分の曲なんだ、というのです。これが有名な「4分33秒」という曲です。要するに彼ら前衛作曲家からすると、今までの伝統的な一つの秩序を持った音楽以外のものも、広義の音楽として取り上げる、それから演奏会場以外のものも取り入れよう、ということのようです。

### 「目だけでなく、耳も鼻も」

私になぜ soundscape に非常に興味を持つかといいますと、私の風景論というのは先ほど申しあげましたように、視覚以外のものにも関心を持つわけですが、soundscape の関係者は当面、聴覚を問題にするんですけども、それだけじゃないようなので心惹かれるのです。

マリー・シェーファーは日本に数回来てるんですが、私は日本サウンドスケープ協会の研究会で、一度話を聞きました。（\*日本サウンドスケープ協会は1993年の6月に発足）

マリー・シェーファーはその際こういうことを言うのです。「耳だけを孤立させるのは健全ではない、ノーマルな状態ではありません。なぜなら、私たちは耳だけで生きているわけではないのですから。しかし耳の大切さを訴える必要はあります。五感の中にバランスを取り戻していかなければならないからです。なぜなら、現代社会において、私たちは目に頼り過ぎているからです。私たちは人々に、耳も目と同様に大切なものである、と注意を喚起しなければならない。けれども、最終的には全ての感覚、全身の感覚について配慮していかなければならないのです。私は個人的にも、他の感覚にとっても興味があります。例えば香り、それに味。味は香りと深い関係にある。それから触覚。これも私たちが最近ないがしろにしてきた感覚なのです」という風に言うのです。こういうことになると、まさに私の風景論とピタリ重なるわけで、私は soundscape、ことにマリー・シェーファーに非常に関心を持つわけなんです。

### 音の原風景

少しく soundscape の中身に入らせていただきますと、私は soundscape を取り扱うときにも、さきほど申し上げました原風景に相当するものが soundscape の中でどう考えられるかということの問題にしてみるのです。シェーファーも archetypal sound と言って、元型音というのを問題にしています。これはユングの「元型 archetype」というのに基づいたもののようですけれども、私も原風景の人類的原風景、国民的原風景、個人的原風景 に見合うような、それに通じるような音というのがないだろうか、ということで、考えてみているのです。しかし、これは本当は間違いでして というのは、原風景を問題にすることが間違いというんじゃないかと、音だけを切り離して問題にするのはおかしいんじゃないか、ということです。確かにそうなんです

が、一応、音、それから匂いとかを、それぞれ分離して考えてみよう、ということで、soundscape の中の原風景に通じる音を検討してみるわけです。

まず「人類的原風景」に通じる音、すなわち安らぎにつながる音、そういうものを考えてみますと、これはいろんな人が言ってるんですけども、心拍心臓の鼓動の2拍子はその一つのようなのです。というのは、胎児は胎生6カ月から聴覚が働き、毎日母親の心臓の鼓動を聞いているわけですが、そのリズムが規則的に動いていれば自分も安全である、という風に安心感に浸っていられるんですね。そういうことで、心拍に通じる拍子 2拍子が人間にとっての基本的な安らぎにつながる音(拍子でいうと)という風に言えるかと思うんです。また、メトロノームを自分の好きな調子に合わせようと言いますと、だいたいどんな人も1分間に50から90の間にセットするそうですが、それは人間の心拍の範囲内なんだそうです。まだほかにもいろんな例証があるんですけども、2拍子というのが、人類に共通の、安らぎを感じる拍子のようなのです。それで私はこれを、人類的原風景につながる音、拍子の一つ(呼吸のリズムもその類)じゃないかという風に考えるわけです。

次に「国民的原風景」につながる音ですが、これは、全く個人的な見解なんですけれども、田の蛙の声を考えたいのです。というのは、明治の中頃という昔の話で申し訳ないんですが、こんな話を知ったからです。

静岡の天竜林業の祖といわれます金原明善が、人夫を雇って一生懸命植林をやったとき、明善はふるさとを離れて生活する人夫たちの心を思って、支配人に「人間はどうも蛙の声を聞かないと落ち着かないものです。それで、この声をたっぷり聞いてもらうために田を造りましょう。ふるさとの声をこの蛙ではっきりと心に留めてもらい、気を落ち着けて働いてもらいましょう」と言って、人夫小屋のそばに田んぼを造った、というんです。そして、今申し上げました「人間は」というのは「日本人は」ということだろうという風に思いますんで、私は田の蛙の声は日本人にとっての国民的原風景の一つではなかろうか、という風に思ってみるわけです。

それから、「個人的原風景」につながる音というのは、これはまあ色々あると思うんですけども、その一つを、こんな体験から考えたんです。奥多摩に行ったことがあったんですけど、ちょうど村のお祭りのときで、ある農家に入っていったら、お祭りで実家に帰っていた中年の女性がいました。その人と話してしましたら、お社の方から祭りの笛の音が聞こえてきたんです。そうしたらその人が私にこう言うんです。「ふるさとの祭りの笛の音はいいね。なんたって、おっかさんのお腹にいたときから聞いていたんだものね」と言うんですね。これは、いろんな個人的原風景につながる音があるでしょうが、その一つ、それも有力な一つだろうという風に私は思ってみるのです。まあこの辺は、多分に独断的なところがありますけれども、私は soundscape の中でも、こういう風に原風景に通じる音があるんだろうと思っています。

### 終わりに

匂いの問題にふれ得ませんでしたでしたが、もうじき1時間をまわりますんで、結びをしたいと思います。今日申し上げたかったことは、要するに、講義のあらましに書いたことに尽きます。すなわち、棚田を含めた水田風景というのは、わが国また我々日本人にとって非常に大事な風景なわけですけども、その棚田なり水田の風景を評価する際には、是非、視覚だけじゃなく、音とか匂いとか、そういう視覚以外の五感、それから原風景、そういうものも考慮していただきたいということです。

山口誓子に「一点の偽りもなく青田あり」という句がありますが、これはまさに視覚的に水田を捉えているものですね。ところが、こういう句もあるんです。それは星野麦丘人という、石田波郷が創刊した『鶴』の主宰者の句ですが、「田の神の一人ごちとも雨蛙」というものです。これはまさに聴覚で水田を捉えたものでしょう。また、こんな句もあります。「ゆうぐれの溝をつたへり稲の香は」(平畑静塔)。これは嗅覚の動員例。まあこういう風に、皆さんには、視覚だけでなく、聴覚、嗅覚、その他の五感をも是非動員して、棚田、水田の風景を評価

していただきたいと思います。

\*なお、棚田の視覚的美の関連については、他のところで、私は次のように記しているので、参考にさせていただければ幸いです。

「視覚的にいうと、棚田の平地水田との大きな違いは、立体的であり、視線入射角が大きいといえる。したがって、俯角景観のすぐれているもの(例えば、三重県紀和町の丸山千枚田) 仰角景観のすぐれているもの(例えば、佐賀県相知町の蕨野の棚田<石積法面の重層的に立ち上がっている様は、まさにピラミッド>)等が多い。また、棚田は圃場整備が進めにくいので、その畦畔は相対的に曲線、それも大きな曲線を描くものが多いが、「自然は直線を嫌う」(ウィリアム・ケント)ともいわれるように、曲線は自然で、直線のように緊張を強いられることなく、安らぎを感じさせる。

棚田には季節性があり、年間を通じて色彩の変化に富んでいる等は、平地水田と変わらないし、また中・遠景において、周囲の農家、山、川、湖、海等が視界に入り、その様相によって、棚田を含んだ総体的景観の美醜が評価されることも、平地水田と変わらない。」

(「棚田の美をめぐる」『風景』第6号,2000年春,風景社)